Bericht des Deutschen Hauses in Naruto

Ruhe（ルーエ　やすらぎ）

Dezember 2014

32

The German House in Naruto

鳴門市ドイツ館館報　第32号
発行日　２０１４年１２月１０日
発　行　鳴門市ドイツ館
編　集　川　上　三　郎
〒779−0225
鳴門市大麻町桧字東山田５５−２
TEL:088 689 0099 FAX:088 689 0909
URL : http://www. city. naruto. lg. jp/germanhouse/
e-mail : doitukan@city. naruto. lg. jp

リューネブルク市親善使節団

今年は10月16日に鳴門市の姉妹都市リューネブルク市親善使節団が総勢64名で来日しました。そして翌17日から20日にかけて、鳴門市ではさまざまな行事が行われました（鳴門市公式ウェブサイトの「広報なると」11月号に記事があります）。鳴門市ドイツ館では17日に歓迎式典として「40周年記念日独市民交流会」が催されました。1974年に両市が姉妹提携の盟約を結びましたので、今年で40周年になるわけです。ドイツ館前の広場で小学生の金管バンドの出迎えの後、広場に来ていた全員でバルーンリリースをしました。抜けるような青空に風船が上がっていくのが美しく、人々の和やかな気持をさらにもり立てたように思います。

例年になく大勢の方が来られたのですが、さらに日本の中高生にあたる青少年が12名（＋引率教師１名）も来たことは初めてのことでした。彼らは大人達が鳴門訪問のあと日本各地を訪れている間、鳴門市にとどまってホームステイをし、中学校、高校のクラスに混じって学校体験をしました。また、ちょうど「ドイチェス・フェストinなると」の開催時期と重なりましたので、青少年交流イベントも企画されました。そこで、ドイツの映像作家ブリギッテ・クラウゼさん制作のドキュメンタリー映画「敵が友となるとき」の日本初上映をしました。

ドイツ館前広場の親善使節団

青少年交流イベントでの一コマ

この映画は板東俘虜収容所をテーマの中心にすえ、当時の捕虜の暮しぶりを伝えるとともに捕虜の孫娘の祖父探しから生まれた交流、さらには保育園児がドイツ語で歌うベートーヴェンの「歓喜の歌」といった現在の日独交流の高まりを写し出しています。もともとドイツ語版だけの作品で、ドイツ各地で上映され、好評を得ていたそうなのですが、日本でも公開したいというクラウゼさんの希望もあり、日本語字幕版が制作されました。これには国際交流員ロバート・テルシッグがクラウゼさんと何度も連絡を取合いながら、翻訳作業の中心となってくれました。

ドイツ館では親善使節団のうち、二人の方と個別にお会いして懇談する機会があったので、紹介しておきたいと思います。

最初はフラヤ・エッカートさん。彼女は神戸の外人墓地にある父親の墓参りも兼ね、使節団より前に早めに来日してドイツ館を訪れてくれました。その際に父親の遺品である当時の資料をいくつか携えて下さり、それらを拝見することができました。夫人の祖父はその当時、捕虜ではなく家族とともに神戸に在住でした。アルバムは丸亀収容所からのもので、ドイツ館が所蔵する写真と同じものもありましたが、そうでないものもあり、それらを他の資料とともに複写させてもらいました。ほかに神

戸港から豊福丸という送還船で捕虜が帰国するときの波止場で撮した写真などがあり、非常に興味深く拝見しました。

この方の父親（ハンス・ゼーリヒ）はおどろくことに、子供のころ板東俘虜収容所を訪れたことがあるというのです。これまでは捕虜の子孫が来館することがあっても、慰問者側というのはなかったのではないでしょうか。そこで早速、当時の記録を調べてみたところ、ゼーリヒという名前の慰問者の記録が４回分ありました。しかも一度は当時７歳のハンスが一人で人力車に乗ってやって来たことも書かれていました。これは彼が娘に話した思い出話とも合致します。

神戸市内に住んでいるはずの子供が、ひとりで徳島市内から収容所まで来たのにはかなり意外な感じがします。しかし母親の手記を読進めると、そこにはハンスが扁桃腺炎対策の転地療養ということで1918年３月から４月にかけての３週間ほど、徳島市内のゲプフェルト夫人宅（夫が板東捕虜）に泊っていたことが書かれています。それで謎は解けました。というのもハンスが板東に来た日は３月26日で、ちょうど徳島での滞在期間中になるからです。それにしてもたった７歳の子供が、以前家族といっしょに来た経験があるとはいうものの、一人で収容所を訪問するとは、よほどしっかりとした少年だったのでしょう。

もうひとりも女性で、リューネブルク博物館館長のハイケ・デューゼルダーさん。亀井元鳴門市長も同席して鳴門市の担当係の者といっしょに懇談しました。同博物館は現在増改築中で、来年５月に新装オープンするとのことですが、板東俘虜収容所開設百周年にあわせ、2017年に板東俘虜収容所に関する特別展示を考えられているそうです。その際に鳴門市ドイツ館所蔵の資料を借りたいとのことで、それにはドイツ館も喜んで協力すると伝えました。その際、鳴門市ドイツ館所蔵品目録をお渡しするとともに、国際交流員ロバート・テルシッグが作成したドイツ語訳も後から送付しました。ただ、細かい打合せはこれからとなります。

ニーダーザクセン州展示コーナーのリニューアルオープン

ドイツ館にお出でになった方はご存知のことと思いますが、当館１階には「ニーダーザクセン州展示コーナー」があります。７月９日（水）ニーダーザクセン州首相府オーネ長官を迎え、

テープカット

このコーナーのリニューアルオープンのテープカットが行なわれました。日本で唯一の、ニーダーザクセン州を紹介するこの展示コーナーのパネルが9年ぶりの改装となったほか、ショーケース内のニーダーザクセン州の商品とグッズも交換しました。

セレモニー後のコーナーの様子

オープンの日程はオーネ長官一行の徳島県への来県に合わせましたので、多くの鳴門市民が来場されました。一行は同月7日に来県し、翌日に徳島県が主催した高齢化社会に関するシンポジウムに参加し、9日朝にドイツ村公園で合同慰霊碑とドイツ兵捕虜が建てた慰霊碑で献花されてからドイツ館に来られました。オーネ長官にとって、歓迎のときに鳴門市大麻町の保育園児たちがドイツ語での「喜びの歌」で迎えたことが一番印象的だったそうです。

保育園児「第九」を歌って一行を歓迎

ところで、今回のリニューアルの準備は長くかかりました。すでに2012年の夏に始めていたのですが、2013年１月の州議会選挙で州政権が変わり、リニューアルの準備はほぼ完了したものの、しばらく延期になりました。その後、2014年に州政府関係者の来県の予定が決まり、改めて準備を進めましたので、７月９日にようやくリニューアルオープンができたという次第です。

和洋大音楽会の開催日

板東俘虜収容所には２つの管弦楽団、「徳島オーケストラ（後にＭＡオーケストラと改称）」と「エンゲル・オーケストラ」がありました。この２つの楽団は徳島市にまで出向いて日本人聴

衆に西洋音楽を披露しています。この２回の「和洋大音楽会」についてはすでに当館報の第18、19号で紹介しました。２回目の音楽会についてはドイツ館にその時のプログラムがあり、開催日（1919年３月22日）ははっきりしています。しかし第１回目の方は、板東収容所新聞『ディ・バラッケ』にも記事がなく、その演奏会があったこと自体長らく忘れられていました。徳島大学教授の井戸慶治さんがドイツのフライブルク連邦軍事文書館でそのときのプログラムを発見して、その時の演奏曲目と開催日が判明したのでした。

ただ、これは徳島衛生協会主催による「和洋大音楽会開催趣旨書」というもので、プログラムと言うよりは開催趣旨と演奏予定曲目が書いてあるものです。趣意書左端の枠外に「大正七年六月二日」と印刷されているだけなので、これが本当に開催日なのか確信は持てませんでした。というのも、その前日に、それも夕刻にあのベートーヴェンの交響曲第九番の演奏会があったばかりで、そのすぐ次の日にはるばる徳島市内まで出かけたことになるからです。演奏メンバーは43名と書かれていて、それだけの人数が収容所から出かけながら、当時の警備警察官の報告には一切記録がないことも不審に思う理由でした。

ところが最近になって、以前ドイツの収集家リンケさん宅を訪問した際に写真撮影させていただいた古写真のひとつ（右）に気がつきました。これはどうやら阿波軌道という、捕虜達もよく利用していた軽便鉄道の車内らしいのですが、注目は手書のポスターの内容です。中央に「和洋音楽会」、右には「来ル六月二日（日）トクシマ公園千口口」、左に「県下ノ名士演奏、ドイツ俘虜出演」と書いてあります。とするとやはり「第九」日本初演（「アジア初演」とも）の翌日に、この演奏会があったことは間違いありません。

演奏曲目を見ると行進曲が多いのですが、ロッシーニの「ウィリアム・テル」序曲やワルツもあり、アマチュアでありながら大曲を演奏した翌日に別の曲を演奏するだけのレパートリーと、体力、気力があったものだと感心します。当時収容所から徳島市内へは途中、上述の軽便鉄道があるものの、市内にまで通じているわけではなく、かなりの距離を徒歩あるいは渡し船で行く必要があり、結構時間がかかったのです。

ドイツでの鳴門市ドイツ館収蔵品の展示

今年は第一次世界大戦勃発から100年にあたり、ドイツではそれに関連するイベントやシンポジウム、展示などがいろいろと行われたようです。ドイツ館の展示の中心である板東俘虜収容所についてもベルリンとトリアの独日協会主催の展示がありました。ベルリンでは８月22日から９月５日まで、トリアでは10月21日から12月21日までの期間でした。この展示のために、ドイツ館の収蔵品から板東俘虜収容所新聞『ディ・バラッケ』ほか何点かの資料の貸出しをしました。海外に貸出しをするのは初めてのことですが、ドイツ館内での展示にとどまらず広く日本国内や海外で展示され、ひいてはドイツ館のことを知って頂くきっかけになれば有難いことです。

ところで、トリアでの展示は前トリア独日協会会長の故ハンス・ローデさんの企画だったもので、昨年当館にお出でになった際『ディ・バラッケ』の貸出しを依頼されていました。非常に残念なことに、そのローデさんが今年５月に逝去されました。その後、アウバート現会長が企画を引継いでくれて、無事開催にいたったものです。

リューネブルクからの贈物

今回もリューネブルク独日協会から鳴門日独友好協会に対して貴重な品物が贈られました。そして例年どおり、鳴門市ドイツ館に寄託収蔵されたのですが、これは捕虜アルバムの複製なのですが、かなり丁寧な作りの美しいものです。アルバム自体にはその人の氏名は記載されていませんが、写真中の当人らしき人物をO.S.と略記しています。最後の数葉に収容所近くに建築されたドイツ牧舎（現船本氏所有）の建築中と完工後の写真があることから、オットー・シュトレであることに気づきました。彼は牧畜の指導と実務をしていたクラウスニツッアーが出資者の富田家を訪れた際などに通訳として付添っていた人です。

このアルバムをどこからどういう経緯で入手したのか、リューネブルク独日協会のゲバル会長に問いあわせたところ、ハンブルク在住のご子息ゲルト・シュトレ氏がお持ちのものであることが分りました。氏は前述のエッカート夫人の知人で、そこからこのアルバムに至ったようです。

ここには青島の８枚と応召して横浜から青島へと出発する時の写真１枚をのぞくと、あとは丸亀と板東が半々ずつ収められています。すでに私にはなじみの写真も多いですが、初めて見る物もかなりあって興味深く拝見しました。さらに写真にはたいてい説明が添えられていて、人物や場所の特定につながり、

非常にありがたいことです。以前この『ルーエ』で紹介したように、捕虜達は収容所を出てハイキングに行っていますが、その際に撮された写真の場所の特定が困難な場合があるのです。このアルバムには三重塔が写っている写真があるのですが、説明がなければ収容所から10km以上離れた山にある大山寺（たいさんじ／おおやまでら）だとは分らなかったことでしょう。この三重塔は1940（昭和15）年に焼失したとのことで、現存しないのです。収容所新聞の記録では大山寺へ２度出かけていて、ほかに寺への登山道の写真もありますので、写真はその際撮影されたものと考えてまず間違いないでしょう。

ドイツ館と周辺のイベント

５月30日（金）鳴門市第九をうたう会により、ドイツ館前のベートーヴェン像近くの斜面に従来のものに加え、新たな「第九」演奏会の陶板が設置され、泉理彦鳴門市長を迎え除幕式があった。

６月４日（水）カールステン総領事が鳴門市役所（平野悦男副市長と会談）と徳島県庁（県知事と面談）を訪問後、午後ドイツ館に来館。その後板東俘虜収容所跡地を見学、ドイツ兵慰霊碑に献花された。

10月19日（日）鳴門史学会2014年大会「第一次世界大戦と俘虜収容所」。神戸大学大学院教授大津留厚氏が「青野原（あおのがはら）捕虜収容所から見た世界」という題で講演。

そ　の　他

４月４日～15日　ドイツ観光展
４月13日　劇団らせん舘公演 「夕陽の昇るとき」
４月20日　ドイツ館のイースターまつり
５月３日～５日　第11回ドイツワイン祭り
５月10日～18日　松下慶一作陶展
５月21日～６月３日　第九展
６月７日～８日　第４回ドイツ館の鉄道会
６月７日～18日　鉄道写真展～高徳線今昔～
７月５日　七夕コンサート
７月９日　ニーダーザクセン州展示コーナーリニューアルセレモニー
８月２日～15日　ドイツビール展
～日独で親しまれているビール～
８月３日　第九の里コンサート
８月12日～14日　第10回ドイツビール祭り
８月23日　こどものおんがく館
９月14日～15日　第７回ドイツフードメッセ
９月20日～10月５日　ドイツ館周辺の遺跡展（徳島県埋蔵文化センター展示）
10月５日　武田牧子ヘルムスコンサート
10月７日～26日　鳴門日独美術交流展
10月11日～26日　リューネブルク展
10月16日～20日　姉妹都市交流企画展
10月17日　鳴門市・リューネブルク市姉妹都市盟約40周年記念日独交流会
10月26日　第21回ドイチェス・フェストinなると

『ルーエ』の掲載サイト変更

当館報『ルーエ』は2001年９月に第１号が発行されて以降、今号で32号を数えます。そしてドイツ語版も2002年から年に１回発行されてきました。これらすべての号を電子化したものは従来鳴門市の公式サイト内で公開されてきましたが、古いものについては保存しない方針とのことで、新しいものしか置けなくなりました。そこでこれを機会に鳴門市の公式サイトでの公開は取りやめ、この11月からすべてドイツ館史料研究会のサイトに引越すこになりました。『ルーエ』の発行は鳴門市ドイツ館と記していますが、実はドイツ館史料研究会の委託事業なので、ここに公開することは当然といえば当然なのです。URLは
http://www.dt-haus.org/ruhe/
です。鳴門市公式サイト内にあるドイツ館ホームページには、このページへのリンクが張られています。なお、ドイツ語版も置いていますが、ドイツ語のページはまだ作成していません。

編集後記

『ルーエ』第32号をお届するのが師走になってしまい、館報を楽しみにされている方には申しわけないことでした。

今年はいつも以上に多くのドイツ人の方が来られました。そのいくつかについては本文で紹介したとおりですが、他に6月12日にニーダーザクセン州教育関係者が来館したのに続いて、8月23日にはノルトライン・ヴェストファーレン州独日文化育英会の研修生が例年のように来館しました。また、習志野収容所元捕虜の子孫の方もお出でになりました。これは何よりも常設展示をもつ資料館・記念館としての鳴門市ドイツ館があるお陰ではないかと思っております。

冒頭の記事で紹介した映画『敵が友となるとき』の日本語字幕版はドイツ館のミュージアムショップで販売することになっています。詳細は鳴門市ドイツ館の事務までお問い合せください（E-mail：info@doitsukan.com）。（川上）